

## NST 活動における BIA (bioelectrical impedance analysis)の有用性

○横山 知幸<sup>1</sup>、川本 佑美<sup>2</sup>、草野 こず恵<sup>3</sup>、高橋 洋平<sup>4</sup>、本多 一成<sup>5</sup>  
梶谷 伸顕<sup>6</sup>、水元 志奈子<sup>1</sup>、西郷 典子<sup>1</sup>、渡辺 幸恵<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 独立行政法人	自動車事故対策機構	岡山療護センター	看護部
<sup>2</sup> 独立行政法人	自動車事故対策機構	岡山療護センター	栄養科
<sup>3</sup> 独立行政法人	自動車事故対策機構	岡山療護センター	薬剤科
<sup>4</sup> 独立行政法人	自動車事故対策機構	岡山療護センター	臨床検査科
<sup>5</sup> 独立行政法人	自動車事故対策機構	岡山療護センター	リハビリテーション科
<sup>6</sup> 独立行政法人	自動車事故対策機構	岡山療護センター	外科

【はじめに】当センターは2000年11月からNST活動を開始した。アセスメント項目は時代とともに変遷したが、体成分を知ることが必要と考え、2012年3月からはBIA(bioelectrical impedance analysis)を導入した。今回我々は、NST活動においてBIAが有効であった症例の内、3症例を報告する。

【方法と対象】BIAは、InBody S20 (Biospace社製)を用い、対象は2012年6月から2013年12月までのNST症例となった3例である。

【結果】症例1、22歳女性。入院して1年後に4カ月で体重50.3kgから45.6kgへ減少した為、BIAで測定したところ体脂肪が20.3kgから15.6kgへ減少した。骨格筋量は減少せず微増していた。症例2、13歳男性。体重が2カ月間で31.9kgから34.4kgと2.5kg増加した。臨床的には浮腫は著明ではなかった。そこでBIAを測定したところ体水分量が1.4kg増加していた。症例3、61歳男性。体重が3カ月間で38.6kgから44.8kgまで増加した。BIAでは筋肉量が1.4kgの増加に比して脂肪が3.6kg増加していた。

【考察】今回の3症例では、体重の増減があったが、BIAを行うことで、体成分分析ができ、体重の増減の原因が分かった。症例1は意識障害の改善により活動量が増え体成分の変化をきたしたものとする。以上より体重の増減のみで、単にカロリーの制限や増量を行うのではなく、体成分分析を行う事でそれぞれに適切な栄養管理ができると考える。

【結論】BIAは簡便で被爆も無く、安全に体組成を知る有用な方法である。